



「富士山測候所物語」 (気象ブックス012)

志崎大策 著

成山堂書店, 2002年9月,
162頁, 1,600円 (本体価格)

富士山測候所は昨夏の2002年7月1日に70周年を迎えた。これを記念するかのように発行された本書は、「富士山頂気象観測の歴史のはじまりからレーダー廃止にいたるまで」を平易に語る、またとない読み物である。著者の志崎氏は、山頂勤務員、レーダー技術者、測候所長として、長く第一線で富士山に携わってきた。測候所と気象観測を取り巻く状況とその歴史について語るのに、一番の適任者ではないだろうか。

本書の内容を章立てと共に簡潔に紹介しよう。

第1章「富士山測候所前史」では、伊能忠敬やシーボルトが関わった標高測定の話から入る。東京気象台のクニッピンは、明治20年代初めに山頂観測所を政府に提案したが受け入れられず、それを嘆いた同気象台の正戸豹之助が、日本気象学会の前身である大日本気象学会の気象集誌に「…速ニ之ヲ建設シテ内外学士ノ用ニ供シ…」と訴えている話が興味深い。

第2章「臨時富士山頂観測所」では、測候所の前身となる観測所の建設(1932年)から無線局の設置、1年限りの約束で始められた「第二極年観測事業」終了時の打ち切り問題と、ぎりぎりになっての財閥の援助、剣が峰への移転が書かれる。

第3章「富士山頂観測所」では、霧氷との戦いや発電の苦勞、物資の輸送に尽力した強力(ごうりき)などを紹介し、太平洋戦争中に行われた「着氷棒」を用いた着氷の研究に触れている。自然風を利用した風洞実験装置について個人的に興味を持ったが、あまり詳しく書かれていないのが残念である。

第4章「苦難の時代」では、戦争と山頂空襲、食糧難と終戦、職員の遭難事故、受電設備の設置を取り上げ、第5章「富士山測候所」では、三島測候所を基地とした「観測所」から独立した「測候所」への格上げ(1951年)、その後の業務や山頂生活における、さまざまな話題が網羅される。

第6章「富士山レーダー」と最終章「庁舎改築とレーダー更新」は、この本で一番のトピックであろう。レーダー建設の経緯から始まり、工事、運用、廃止にいたるまで、関わってきた多くの職員や業者の息遣いが伝わってくる。

読後にあらためて感じたのは、富士山で気象についてとらえることができるターゲットの幅広さである。天気予報だけでなく、その時々において注目された、雪の結晶・霧氷・光学現象・人工降雨・山岳波・レーダーによるリモートセンシング…。これらが気象学、特に観測分野におけるフロンティアであった時代が生き生きと描かれている。この流れは、現在の山頂における大気化学観測やGPS気象学など新しいチャレンジ(これらについては触れられていない)に引き継がれている。

特定の一分野に関する専門書ではないので、気象学の研究者や学生が、この本だけで最新の知見を得ることはできない。しかし、自由対流圏に顔を出す急峻な独立孤峰におけるこれまでのアプローチは、これからさまざまな観測を計画する読者に、多くのヒントを与えてくれるに違いない。

この本の底辺に流れているのは、日々の観測を保守し継続する職員らの「測候精神」と、それを支える組織や強力・業者の努力とチームワークが、困難な業務を長年にわたってうまく機能させてきたことへの誇りである。気象観測に携わる多くの会員に読んでいただきたい1冊だ。

(気象研究所 高橋 宙)